

昭和十一年十一月號(第百八十五號)



南京占領



皇軍武運

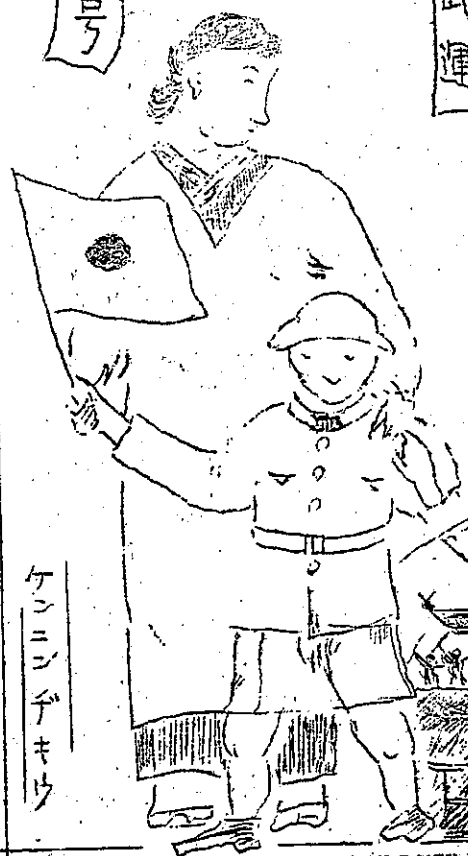


長久



祝念号

祝賀



ケンミンチキウ

大村尋常高等小學校を以て編輯部發行

47 44
45

學校日誌

十二月十一日午後六時半 南京城門上樓祝賀提灯行列(尋三以上)

十二月十四日

十三日午後五時南京陷落ニツキ

朝礼ニ際シ

1. 學校長訓辭

2. 宮城遠拝

3. 靖國神社遠拝

4. 五歳三唱

十二月十五日

午前七時四十分祝勝奉告祭大神山神社参拜

十二月二十日

大掃除

十二月二十四日

終業式

ツツリカタ
一ネソ

アカチヤン

ウチノアカンチヤンハデブデスオ
ンブシテモオモクテスグオロシマス
ネイチヤンモオンブシマセン。ワタクシ
ハスコシオンブシマス。ウチノア
キラウハイツデモワラヒマス。
ゴハンヲミセルトホシガリマス。
キノフモオチヤワンカラトリマシ
タ。ウチノアカチヤンハワラヒマシ
ツデモカハイラシイデス。

小サイトキ

ワタクシガ小サイトキ。ウチノア
ノチヤダンズノ前デ。ウチノア
カブリマシタ。ウチノア
バアチヤンガ。ウチノア

リマシタ。ソシテハ
チヤンガウチノア
アチヤンハカステラダトオモ
テ。タバソコオッタノデス。バ
チヤンガクサンテミタラ。ウチノ
ダツタノデス。ソシテバアチヤンハ
クサイトイッテソレヲニハニ
ステマシタ。ソシテミンナガワ
ラヒマシタ。マツチヤンハナシ
カタオモッテワラヒマシタ。

ウチノア

ウチノアチヤンニサイチヤン
ハイイコガキマス。私ノモッテ
モノガホシイトナシモアタマ
サゲテニコニコシテソバニキ
ワタクシハドンナホシイモノ
スダマケテアゲマス。ウチノ
オチヤンジヤノニ三日マハカ

シニアアルキバジメテ、イマハ大
アシモセアシモアルクヤウニオリマ
シタ、ホンタウニカハイイコデワ
タクシハサイチャンガダイスキデス。

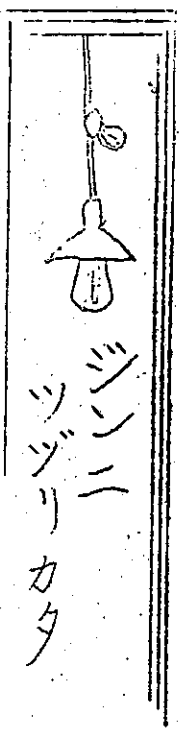
イモウトトウチノ人

オクヤマエツ子

オ正月

オクヤマユキヲ

ワタクシノウチデ、パンカハイイノハ、
シゲルデス。モウニツニナリマシタ。
ケレドモ、オカアサンノオチチヲ
ノミマス。オチチハアサトパンニ
マセマス。オカアサンハ山ヘイッ
シゴトラシテキマス。オトウサン
ハスサキニイッテハタライテ、
ス、オニイサンモ、シゴトガスキ
ス、ソレデオカアサンモ、ニチエウ
ダケツレタイキマス。シゴトニイッ
テトミヂヤントオニイサント山
ノシマウダクヲシマス。ウチノタカ
シカ山ヘイキタイトセマシタ。
オカアサンハセメルノデ、タカシ
イトオモヒマス。



このあひだ

ママシロ ヒゲ

このあひだ、私がつくえを出して、べん
きょうをしておるうちに、だんく
ねむくなったので、ふとんをしいて、
ねました。それでも、まだ、ねむれない
ちよいと、上をむいて、おるうちに
ねて、しまひました。あまになつて、おかあ
さんが、「ヒゲコ、きのふは、おまへが
かはいさう、だと思つて、もうふを、かけて
あったかくして、あげたんだよ」と、いった
ので、私は「おんなに、かあちゃん、が私
を、かはいがって、くれるの、と、いつて
私は、うれしくなつて、泣いて、しまひました。
④私のくせ、テラダケイコ
私は、「うい」といふくせがあります。
このあひだの、土曜日の、晩、きみこ

と、ふたりで、ふとんに、もぐつて、おた
ら、どうちやんが、けいこ、べんきょう
をしたか、と、ききました。私が、
「けい」といふた。さうすると、かあちゃん
が、「けいこ、けい」といふ。こは
なんだ、と、ききました。私は、そのとき、
はづかし、かつた。そのとき、みんな、ごは
んを、たべて、おきました。
⑤うちのおとうと、イネキ、ヨシコ、
私は、この、あひだ、おばあさんの、うちへ
おつかひ、にいきました。さうして、三十也
ん、もらひました。私は、その金を、ちよえ
ばこ、にいれく、おきました。もしたら、
うちの、おとうと、が、ちよえん、ばかり
もち出して、どこかへ、もつて、いつて、
お金を、なくなしました。私は、それま
しらないで、おました。ある日、おとうとに、
お金は、どこへ、もつて、いつた、と、き、
ますと、なくなした、と、いつた、から、どこ
に、なくなした、か、と、き、ますと、なんだ

か わからないこと をいって えぼって
おます。うちの おとうとは ほんとうに
いたづら です。

◎とりのゑさをとりたいた

ウザハ キヨシ

このあひだ かあちゃん と ねえちゃんと
すぎちゃん と とめちゃん と 私と
とりの くさを とり に 行きました。
さうして すこし 行って まいださんに
き、に いきました。さうしたら、いくと
いった から 一しよに いきました。すこし
いくと つきました。すこし とってから
私が「かあちゃん おくわし を たべてい
と きいたらば のい」と いった から 父
な一しよに きた人 を よんで たま
した。また とつたら 一ぱいに なった
ので また おくわし を 出して みんな
に わけて やって さうして みんな
たべて かへりました。

◎昭和十二年十二月十二日 なんといふ
十二の そつた おめでたい 日です。
この十二月十二日には どんな ことが
あつた か おしらせ しません。

「モシモシ」と よび かけて 遠い所
から 遠い所へ お話を しかける デンワ
は、一ぼん はじめ ドイツの 人が かが
へ出した のですが それを アメリカの
エゲソン と いふ 人が もつと うまく
くふうして つくつた ものです。

その デンワが はじめて 日本で
つけたのは 明治二十二年の ちやうど
今月の この日 でした。そのときは、どう
きやう しない だけ でした。
それが 今では どこへ いても
「モシモシ」の こゑ が きかれる やうに
なりました。

なほ おかど ふね(はじつてある舟)とも
「モシ」が 出来る やう になつて
おます。

三尋三ノ文

◎くぢら見物

矢堀 宏

ほげいせん の きえきが 三かい なつた。
くぢらが とれた のだ。
ほくは じてんし やで きよせへ 走つた。く
ぢらは まだ あがつく おなかつた。
もつ見物人が 山の やうに あつまつて 来た。
しばらく して くぢらが 引あけられ 来た。
それは 大きい まつこうくぢら だつた。
僕は 人たちが なぎなた を もつて くぢ
ら を 切る のを しばらく 見物 して かへつ
た。
ほげい 船は もう はとば の 中 にかかて
来た。

はねて みました。
私は それを じつと 見て みました。
昨日 も ぼつと とはねて みました。
今日 も ぼつと とはねて みました。
よく 見ると 石に 一つの まにかちひ
さい あなが 出来て みました。
私は それを 見て かんしん しました。
いもうと を つれて 来て みせると い
もうと も かんしん しました。

◎りつ子

横山 昭

りつ子は このごろ 僕を きらひ になつた
けれど、僕が 學校へ いくと じぶんも
いくと いくと なきます。それで 僕
は つれて いきます。

また りつ子が わるい ことを すると
僕はおこります。すると りつ子は
「ぬー」と 言って おこりかへし
ます。おとうちやんが おこると
また して しまいます。

◎雨

菊池 トメ

私が まどから 外を のぞいて 見たら
外の 石に あまた 水が ぼつと

それかりこのごろ、おとうちやんが外
にいくとじぶんもいくといつてなき
ます。それでおとうちやんもつれて
いつてやります。

それかうおかあちやんよりねえちや
んをすきになりました。それでねえ
ちやんの所へいくやうになりました。
それでも、おかあちやんがゐないと
「おちやあちやん、し」といつておま
す。

●弟

ぼくの弟は、今年三つです。
弟はまだよく口がきけません。
よるおそくまでおきてゐてなかな
かねないの、おかあさんは「ねな
さい」と弟にいひます。弟は
にげを行つてなかなかさ、ません。
おかあさんがでんきをおけしにな
ると弟はなさいたします。そして

菊池 弘

でんきをつけるとよろこびます。

●のり子ちゃん 永田 尚子

うちののり子ちゃんは今年二つにな
りました。
おしやべりはしませんか、かけることも
できるし、けたまはくこともできます。
私が學校からかへつてくると、うれしそ
うにとびついできます。
うちののり子ちゃんはいはいいです。
「よいいどん」の言葉を「おういよん
といひます。人をよぶ時には
「あい」といつてよびます。
私がべんきやうをしてゐると、たま
のけをひつはります。
私のがのり子ちゃんを遊びにつれて
いった時、すみちゃんか「のり子ち
ん」といひますとのり子ちゃんはは
づかしさうになさいました。
うちののり子ちゃんはいはいいな。

綴り方
尋四



●弟の死 中澤 妙子

五日前の裁縫の時間でした。永田先生がい
らつしやつて、「今お家から呼びに来たからす
ぐ帰きなさい」とおつしやつたので、私は何事
があるのだらうと思つて、心配しながら急いで
帰つて見ますと、照彦ちゃんのおもひ、お父
さんお母さんおいしやさんが心配さうなお顔
をして居ましたので、わけを尋ねますと、大へ
ん悪いやうなお話でした。照彦ちゃんは今年
五歳で二日前から病氣でした。
私がえげへ行つて、「照彦」と呼ぶと、「うん
と返事をしました。若さうでした。けい
さつの方でも来い下さいました。夕方になつ
ても心配で一つも御飯が食べられませんが

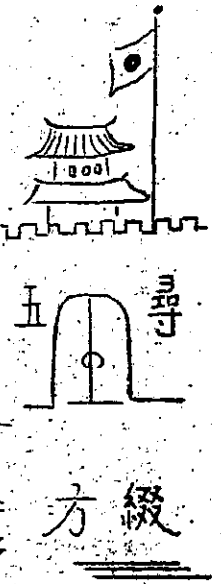
した。其の中にかんご婦さんが来てくれました
ので少し安心しておきました。

夜の一時頃、扇浦の森さんの叔父さんと起され
て飛走しました。叔父さんが「照彦さんが今
死にさうだから早く行つて見て上げなさい」と
おつしやいました。私と道彦はびつくりして
急いで照彦のある部屋へ行つて見るとお父さん
もお母さんも泣いて居ました。私は道彦と二人
でえげへ行つて「照彦」と言つて泣きました。
其中に照彦ちゃんはお祝に居た人たちやおな
かのおばあちゃんに「人、やさしくいさやう
なう」と言ひました。お母さんが「天国へ行く
のね」とおつしやると、「うん、天国」と言ひま
した。其時、照彦ちゃんはかはいとお手ぐで
兵隊さんの様だ、いっけいをして「もう是をせし
まひ」と言ひました。みんな泣きながらいつ
くりしました。すると、お父さんが「もう何
にも言ふな」とお母さんと言ひました。えい、
「照彦ちゃんのすきなさんぶかを歌つてやり
なさい」とおつしやいました。お母さんは

さんびかの本を持って来て歌ひました。私も
 弟も泣きながら歌ひました。照彦も苦
 しい息の下から一生けんめいに一しよと小さ
 い聲で歌ひました。私は、かなしくてもう歌
 ひなくなつてお母さんに取すがつて泣きまし
 た。もう其時には照彦ちゃんも耳も聞え
 なくなり、聲も出ませんでした。それでも口を
 動かして死ぬまでさんびかを歌ひながら死
 ました。照彦ちゃんは今頃、天國に行つて
 一人でさんびかを歌ひてゐることでしょう。
 私は、照彦ちゃんが大丈夫な時にもつと、かは
 がつてやればよかつたと思つてゐます。

◎ 長い病氣 鶴澤くみ
 此の九月頃からお兄様は、かぜでねえ居ま
 したが、或日、おしいや様に見ていたかと
 「これは少し悪い方ですわね」などい
 さんたちとお話をし居りました。もう
 帰るといふ時
 「今ねえおるのは、電信所長さんとい

人ぐらゐです」
 と言つて行かれました。
 それから二日たつたから申澤さんの五歳
 ぐらゐの子があぶない、と言つておまじが
 三日目に、お母さんが
 「大へん申澤さんの子はえらいねえし
 つけいし死んだんですつて。此の頃始
 めてだね。」
 とおつしやいました。其の翌日、盛ちゃん
 「妙子さんの家の照彦ちゃんも頭が
 んだつたね。りかうの子は早く死ぬん
 だつて。うちの花子もあたまよく、りかう
 だから死んだんだつて。」
 とお父さんが言つたと、教へてくれました。お兄
 さんに、其の事を言つたら
 「いよく、おれの死ぬ番だ。死んだら、
 おさうしをしておくれ。」
 などいふ言ひをしました。向籍になつたお兄
 さまの病氣はなほるぞせう。家中では毎
 朝、神様にお祈りしおます。



南京陥落 平野昌代

昭和十二年十二月十三日午後十一時二十分
 完全に南京を陥落させました。
 今朝起きてラヂオのそばで勉強してゐると、こ
 いふ事が放送されました。
 家中の者は戦況如何と皆耳を傾けて一心に聞い
 て居た所へ、二のおめでたい放送に思はず喜びの
 声を上げました。ラヂオが終わるとすぐ國旗をか
 げました。

大日本帝國の兵士が皆、御国のためにとの心
 で一身を捧げ奉つたので、南京をおとせたのだと
 思ふと、感げきの涙が湧上ります。
 しばらくは心が動えうして何も手につかず、た
 られしい、と思つておました。しかし南京
 をおとしてもまだ後にロシアといふ強敵が居る
 から、皆心を一にして御国のために全力をつくませう。

捕鯨船 後藤正義

いよく待ちかねてゐた捕鯨船がやつて來
 ました。ボートといひよく汽笛の音をきくや
 いなや僕は家をとび出しました。今年になつて
 から鯨を見るのは始めてです。大勢の人にま
 がつて捕鯨會社にかけつけると、丁度鯨を上げ
 る所でした。ガラン／＼と巻くワイヤリに
 引かれて、小山のやうな鯨の體は次第に上つて
 來ました。いよく上りきると今度は料理で
 す。大きなほうちやうの月がしやり／＼と
 なつて見ると、内に肉のかたまりがはがされ
 て行きます。三十分もたつ頃にはもう骨はか
 りになつてしまひました。海水は血でまつか
 りにまみつておます。

かへらうとしたら、元日丸の平田さんが鯨の肉
 をくれしました。僕はそれを下げて家に來ると
 弟達が兄さんその肉を二からもちつて來た元
 ときいたので、捕鯨會社からといふと、今度とい
 たらつれていつてといひました。



顔

江平ミキ

「つてほつちやん上手だね」といふと、ほつちやんは「よちえちやんの方が上手だよ」といつたま、

「また歌ひ出しました。それは、皇軍さつそらみぶだうだうと私たちにもまはな、やうな声を出してびちく、と前へ歩い

て行きました。その後をついて行く、とほつちやんは「これからかこはれた人形を持って来て、人形を話しながら、歩いて行きます」

「死んだ弟」 川崎ヨシイ
「私の弟の正好は三つでなくなりました。い

つも私が學校からかへると、姉ちやん、と

いってとんで来て、私のかばを、取つて、机の上

おいた事など、今更のやうに、眼の前に、這んで来

ます。死ぬ時、みんを合せて、めまつちやん、見

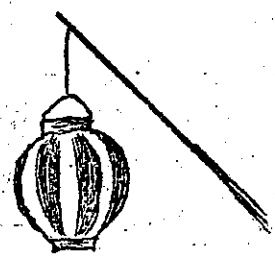
がむやうに手を合せて、めまつちやん、見

舞に來た人は、泣かぬ、人はありませぬ、でし

た。こゝろに早く行つてしまふなら、生きても

る間もつと、かあいがつてやればよかつた

と思ひます。



尋 綴 方

提灯行列

真山 求

今夜南京陥落の爲提灯行列を六時半からし

す。と黒板に書いてあつたので、どうも南

京も落ちたのか、と思ひながら大勢で清瀬に

行つたが提灯行列の事が氣になつてしかたが

なかつた。日は西の山に沈んだ、僕は六

つてほつちやん上手だね」といふと、ほつちやんは「よちえちやんの方が上手だよ」といつたま、

「また歌ひ出しました。それは、皇軍さつそらみぶだうだうと私たちにもまはな、やうな声を出してびちく、と前へ歩い

て行きました。その後をついて行く、とほつちやんは「これからかこはれた人形を持って来て、人形を話しながら、歩いて行きます」

「死んだ弟」 川崎ヨシイ
「私の弟の正好は三つでなくなりました。い

つも私が學校からかへると、姉ちやん、と

いってとんで来て、私のかばを、取つて、机の上

おいた事など、今更のやうに、眼の前に、這んで来

ます。死ぬ時、みんを合せて、めまつちやん、見

がむやうに手を合せて、めまつちやん、見

舞に來た人は、泣かぬ、人はありませぬ、でし

た。こゝろに早く行つてしまふなら、生きても

る間もつと、かあいがつてやればよかつた

と思ひます。

よくならんでゐた。家々には國旗がひらめき

子供達はうれしそうに見てゐた。大村中をま

はり波止場に出た。扇浦も提灯行列だと見え

てきれいだった。

神様 重田 弥生
「神様の前的小石の音も何となく神々しく感じられる。口をすく、手を清めて神様の前に立つ。おじぎをして鈴をならすとあたりはしーんと静まりかへつてゐるので高々とひびき渡る。昌代さんが「おめ、神々しい音」とびつくりする程大きな聲で言つた。ほんとは何となくひびきのこもつた音だ。神様にお参りする事は心の修養にもなり、事である。これからはなほ、戦線に立つて御國の爲にお盡し下さる兵隊さんの武運長

人の話を聞いて涙が眼一ぱいたまつた。侍様に
かかつてある和美ちやんの寫眞の微笑せむる
顔が思い出されて泣かされてしまひます。今は
あの世で一人とほくと杖をつき三途の川を渡
つてお母様に逢つて楽しく過してゐる事とせう。
お寺参りの時お坊さんが和美ちやんが幸福にな
るには同級生が勉強し先生と父母のいひつけを
守ることが何よりですと云ひました。私達一同
和美ちやんが幸福になりますやう一生懸命はげ
みませう。

△亡き友 石津弘子

去年の今頃は彼のセーラ服を着て校庭の一隅
で本を讀んだり何か獨りご物思ひに沈んでゐた
友は何處か淋しさうであつた。が同級でも肥つ
てゐる方が丈夫さうだつた。その友が今は不歸
の客。思ひもよらぬ事である。花かとも好き
で一本やつてもうれしかつた。今年の春はフリジ
ヤの花をたくさん墓前に上げるつもりである。
八月四日は私達の忘れる事の出来ぬ八月日であ

る。夜寝る時和美ちやんの事を考へると獨り
に涙かとのどもなく流れる。いつも床の上
で亡き友に幸あれと静かに黙禱をさしける。
△右三通の綴方を捧げつゝ、しんご菊池和美さんの
靈に哀悼の意を表します。

△友 浅沼和夫

僕達の級で今年新しく上つた名前を水家正
男と呼ぶ者がゐる。セリが高く少し丸顔であ
る。ニムケネムケを「ヤウ」と云ふ。どんなあ
けか知らぬが皆が呼んでゐるから僕も呼ぶ
やうになつた。頭の後の方におでこかこまご
ある。算術の時黒板に彼が書きに出るとおこ
きの所の毛が特別高く生えてゐるからラス
笑ふ。野球も上手なので体操の時間等とよく
キヤッチャーをしてゐる。彼は朝早くから大鼓
を鳴らしてお経をよむ。漫画の珍念と云ひたい
ところだ。家の外に話すと今にえらい坊さん
になつてからかかつてはいけなると云ふ。若
しなうなつたら僕らが死んで時無料で立派な
葬式をして貰はう。

高二

卒業感想

和田昌明

三百六十五日といふ長い年月は後七日七
日程でゆめの様に、クダのやうに過ぎ去つた。此が
イ三年の新年を迎へるのである。
おぼろげに、この年月を振り返つて見ると成程
この年は國難の年であつた。

七月末から愛した文部省愛もいつ終るや獨
り知るべからずこの事象が二十五年の莫大
な命を犠牲にし、血をながし、悲し
み、涙を流し、此の年を振り返つて見ると成程
この年は國難の年であつた。
七月末から愛した文部省愛もいつ終るや獨
り知るべからずこの事象が二十五年の莫大
な命を犠牲にし、血をながし、悲し
み、涙を流し、此の年を振り返つて見ると成程
この年は國難の年であつた。

しやうとして朝から夕方まで三年の新春
を迎へよう。

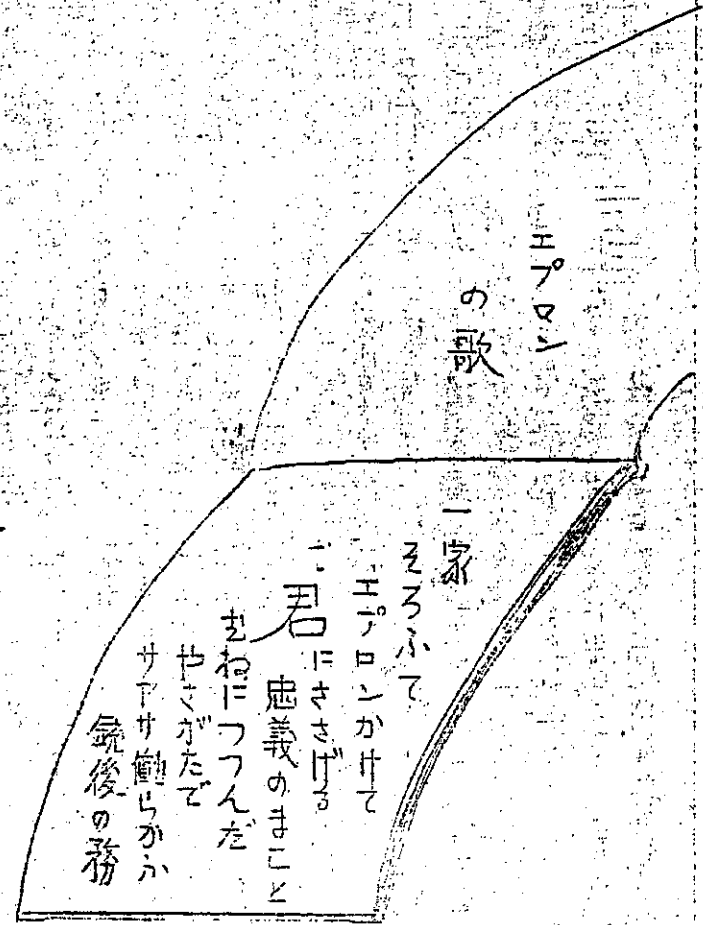
母を思ふ一念 石井愛子

死んで三年たつ母を思ふ心はかくじける程の
悲しみはなんとたとへてよいのかわかりませ
ぬ。此の間も私と私子ちやんとお話しをして
らえようとしてゐると石津のおはさんか来て
お魚を切つて下さいました。其の後姿を見て
つくづく感じたのは母がおたなはらばこつやつ
て人の世話にならなくてもすむものに又母がい
ないために世話をしてくれらうのが誠に氣が毒
でたまりません。母の心は鏡の如くにすぎさう
なつた心でさしい心でした。なせ世の中をたかた
れたのであらうか。
それは人間の運命であるからしかたがない
からあきらめようといふあきらめられな
い。

母を思ふ一念 石井愛子
母を思ふ一念 石井愛子
母を思ふ一念 石井愛子

國民精神總動員

昭和三年十一月発行第百八十五號



陋習を打破せ

形よ心りだ